

変形性股関節症について



市立函館病院

整形外科

山本 祐司 科長

略歴

平成8年、弘前大学医学部医学科卒業、平成12年に同大学院医学研究科を修了後、同大医学部附属病院ほかに勤務、ピッツバーグ大学留学、弘前大学大学院医学研究科整形外科学講座准教授などを経て、令和6年4月、市立函館病院整形外科に着任し、同時に科長就任。日本整形外科学会整形外科専門医。

変形性股関節症（股OA）は、股関節に生じた変形性関節症（OA）であり、関節軟骨のすり減り、関節内に水がたまる（関節水症）、骨の変形などで、痛みが生じ関節機能が障害される疾患です。股関節は骨盤と脚をつなぎ体重を支える重要な関節ですので、その機能が障害されると移動能力が低下し「口コモ」の原因となります。

我が国では発育性股関節形成不全や寛骨臼形成不全など子供の時の発育障害が、股OAの主な原因となっています。また、股関節への過度の力学的負担も股OAの発症や進行に関連しており、肥満、重い物を持つ作業の職業、過度のスポーツはその危険因子です。

診断には、問診と診察のほかX線検査が行われます。関節軟骨がすり減ると関節の隙間が狭くなり、進行すると骨棘や骨のう胞などの骨の変化が見られます。MRIでは、関節軟骨のすり減りや、関節水症、骨の腫れ（骨髄浮腫）など、より詳細に病態を把握することが可能です。治療は保存治療が基本です。股関節への過度の負担を減らすために体重管理（減量）や、重い物を持つ作業を減らしたりします。運動療法も痛みの軽減や機能改善に効果があり、股関節のまわりの筋肉を鍛える筋力トレーニングや水中歩行が推奨されています。痛みが強い場合は、鎮痛薬を内服し、痛みを軽減させ身体機能を維持するようにします。関節内注射を行って痛みを

軽減させる方法もあります。手術治療としては、自分の関節を温存する手術と、人工関節に交換してしまう人工関節手術があります。自分の関節を温存する手術は、寛骨臼形成不全があり、関節軟骨のすり減りが少ない初期の場合にすすめられます。ただし、50歳以上では術後成績が劣るといわれています。一方で、人工股関節手術は関節の変形や破壊が進行している場合に選択され、痛みを取る効果と機能改善に優れています。近年、手術手技の向上や人工関節の改良などにより、術後早期に機能回復が得られるようになってきました。また、合併症のひとつである人工関節脱臼は減少傾向であり、術後の動作制限も行わなくてもよくなってきています。

軽減させる方法もあります。手術治療としては、自分の関節を温存する手術と、人工関節に交換してしまう人工関節手術があります。自分の関節を温存する手術は、寛骨臼形成不全があり、関節軟骨のすり減りが少ない初期の場合にすすめられます。ただし、50歳以上では術後成績が劣るといわれています。一方で、人工股関節手術は関節の変形や破壊が進行している場合に選択され、痛みを取る効果と機能改善に優れています。近年、手術手技の向上や人工関節の改良などにより、術後早期に機能回復が得られるようになってきました。また、合併症のひとつである人工関節脱臼は減少傾向であり、術後の動作制限も行わなくてもよくなってきています。